

【実践論文】

保育者養成校における音楽能力の育成についての一考察

— コード奏法の学びと効果 —

内田恵美子

(東海学院大学短期大学部)

要 約

本研究は、保育現場で毎日のように行われている歌の活動を支える保育者の「弾き歌い」能力の向上を目的として保育者養成校（以下養成校とする）での音楽授業のあり方について検討したものである。調査によると多くの保育現場でピアノ等の鍵盤楽器を用いて歌の活動が行われていることが分かり、さらに別の調査でも、保育現場で必要とされる音楽能力は「平易な弾き歌いができること」「楽曲のアレンジ能力」が上位であったことが判明している。養成校の学生はピアノ演奏が得意でない学生（以下初学者とする）が半数以上を占め、同時にピアノ上級者も混在しているが、この状況の中で初学者でも豊かな歌の活動が展開でき、上級者はさらに多彩な活動が展開できる「弾き歌い」や「アレンジ能力」の技術を習得できる方法としてコード奏法が有効的であると考えた。コード奏法の有効性の考察や学生それぞれの程度に合わせた具体的な指導方法を実践、考察し、合わせて授業内容の課題や改善点を検討した。

キーワード：弾き歌い コード奏法 保育現場 ピアノ レベル

1. はじめに

本学での保育者養成のピアノ実技を中心とした授業として、1年次に「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」2年次に「ソルフェージュ」が開講されており、バイエル等のピアノ教本を使用して基礎的なピアノ実技を習得する事と並行し、子どもの歌の活動を行うことができる技術として「弾き歌い」を取り入れている。

子どもの歌の活動は筆者の行ったアンケートでもわかるように、保育現場では毎日のように歌の活動が行われている¹。立本（2008）の調査でも多くの保育現場で歌の活動がされており、またそのほとんどの活動にピアノやオルガンの鍵盤楽器を使用していることがわかる。さらに大谷・鈴木・大場（2004）の調査によると、保育者養成校で養って欲しい音楽の基礎的技能は「弾き歌い」であると述べており、子どもの歌の活動は保育現場では欠かせない活動となっている。

「弾き歌い」は子ども達の様子を観察しながら弾き歌いをおこない、また、そこに子どもたちが感受するための表現活動が必要となる。弾く、歌う、観察する、表現する、これらの行動を同時にすることになるのである。幼稚園教育要領の領域「表現」の記述に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と示されている。さらに8つの内容の中でも「(2)心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」「(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊ん

だりするなどの楽しさを味わう」この2つを意識して歌の活動を行うべきと考える。つまり、歌う活動を、毎日の日課や歌わされるように歌うのではなく、子どもが創造性や感受性、表現力をいっそう豊かにする場である必要がある。

それに加え、「領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること」と示されており、各領域が相互に関連しながら進める必要性を指摘している。歌の活動においても、保育の各領域が相互に関連して進められる領域「表現」の方向性を尊重することは重要と考える。

歌の活動で主に関連するのは「環境」「言葉」であろう。領域「環境」では、「言葉」自然との関わることでより自然の変化、好奇心や探求心を感じ、自然への愛情の念を持つようになる。」「動植物の世話や共に遊ぶことにより、生き物への愛着、生命の素晴らしさ、身近な動植物をいたわり大切にする気持ちを持つようになる。」と示されており、また領域「言葉」では、「絵本や物語などに親しみ、自分の未知の世界に出会うなどしながら興味を持って聞き、思いを巡らすなどの楽しさに浸ることを通して、その言葉の持つ音の美しさや意味の面白さなどを友達と思い合わせ、必要に応じて言葉による表現を楽しむようになる。」とあり、子どもの歌には、季節の歌や動植物の歌が多く、物語的要素や絵本になっている子どもの歌もある。植田（2014）は「子どもたちが、

単に歌うだけではなく歌詞に即した歌い方を工夫し合い、「音楽を深め合う活動」を推し進める姿勢が引き出せることが明らかになった。音楽活動の中で生じる、子どもの気づきや発見を生かして発展させることが、表現し合う姿勢や、興味を持って取り組む姿勢を引き出し、そこから音楽を深め合い、音楽の下地育成を助力することへとつながった」と述べている。

このように、「表現」の活動は「環境」「言葉」と密接に関わらせて活動していくべきであるが、このことを意識した歌の活動を、ピアノを弾きながら行うには難易度が高く、特にピアノ初学者が行うのは非常に困難であると予想される。

しかし、前述したように本学幼児教育学科の学生は、ピアノ上級者もいるが、学生の約半数はピアノ未経験者であり、経験者であっても限りなく初心者に近い学生が多くを占めている。さらに限られた養成期間で多くの子どもの歌を習得する必要がある、表現の活動まで到達することができない学生が多いのが現状である。

そこで、初学者でも豊かな歌の活動が展開でき、上級者はさらに多彩な活動が展開できる技術として、コード奏法が有効的であると考え、コード奏法の有効性の考察や学生それぞれの程度に合わせた具体的な指導方法を実践、考察し、合わせて授業内容の課題や改善点を検討する。

2. コード奏法の有効性

中野・河野（2012）が幼稚園と保育所 150 園を対象としたアンケート調査を行い保育現場で必要とされる音楽能力を尋ねたところ、「平易な弾き歌いができること」「楽曲のアレンジ能力」が上位であったことが判明している。平易な弾き歌いとは、子どもの歌を一般の楽譜通り弾くことが必ずしも望まれていないという事であり、それよりも簡易な演奏や様々な場面に応じたアレンジ能力が求められていることがわかる。アレンジ能力とはコードによる演奏技術であり、コード奏法が保育現場では最も必要な音楽能力であると考えられる。

さらにコード奏法の有効性としては、紙谷・後藤（2008）は「各自の演奏レベルに応じた余裕を持った演奏が可能となり音楽的知識や技術の有無に左右されない。」また、「演奏技術が向上するのに伴い、伴奏を徐々に高度なものに作り替えていくことが可能である」と述べており、前述したように約半数のピアノ初学者からピアノ上級者までが混在している講義の中で有効な指導法だと考える。

3. 研究方法

3-1 実践方法

本学では「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」において、楽典授業とピアノ個人レッスンを隔週で行っている。ピアノ個人レッスンでは「大学ピアノ教本」^Ⅱ等を教材としたピアノ演奏技術を習得することと並行して「保育のうた 155」^Ⅲ等を使用し保育現場で実践できる子どもの歌の弾き歌いを指導している。「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」は1年次に開講されており、2年次でのピアノ個人レッスンを受講できる科目としては「ソルフェージュ」が開講されており、筆者が講義を担当する「ソルフェージュ」においてコード奏法を取り入れて指導した。

「ソルフェージュ」は隔週で講義とピアノレッスンを展開しており、講義ではML教室^Ⅲにおいてコード奏法の理論と練習、ピアノレッスンでは担当教員による個人指導をしている。

前述したように学生の演奏レベルにかなりばらつきがあるため、レベル1の奏法からレベル5の奏法までのレベル表を作成した。（表1）講義では毎回数曲の課題曲を出し、それぞれレベル1からレベル5までのコード奏法の実例を教授した。その上で学生は自分に合う奏法を選び、必要である学生は楽譜にイタリア音名を記入させ、練習した。

講義でのコード奏法の学びを個人指導で確認と指導が受けられるよう、講義内容のリフレクションシート^Ⅳを記入して内容を担当ピアノ教員へと引き継いだ。ピアノ個人レッスンでは、「大学ピアノ教本」等の練習曲、「保育のうた 155」等の子どもの歌の弾き歌いに加え、課題曲のコード奏法の個人指導を取り入れた。

表1

レベル	演奏法
レベル1	根音のみでの演奏
レベル2	和音での演奏
レベル3	レベル2の簡単な変奏
レベル4	曲想に合わせてレベル1～3を組み合わせる
レベル5	レベル4にさらに、曲想に合わせてアルペジオやオブリガード、構成音を取り入れて演奏する。

3-2 コード奏法指導の概要

1年次後期「幼児音楽Ⅱ」で英語音名、基本和音と転回形を学んでおり、「ソルフェージュ」講義ではその応用としてコード奏法を指導した。

使用している楽譜「保育のうた 155」では、ハ長調

92 曲、へ長調 47 曲、ト長調 15 曲、ニ短調が 1 曲であることから、講義ではまずへ長調・へ長調・ト長調、この 3 つの調性でのコード奏法を学ぶことから始めた。

コードはそれぞれに働きがあり、それらを組み合わせ、影響し合わせるかによって音楽の流れが創造される。どのコードもトニック (I)・サブドミナント (IV)・ドミナント (V) この 3 種類の機能のいずれかに分類され、これらを主要三和音と呼ぶ。様々な楽曲は必ずこの主要三和音を中心に作曲されており、特に子どもの歌のような短い曲では主要三和音のみで作られている楽曲が多い。そこで、コード奏法としてまずは、へ長調・へ長調・ト長調の各主要三和音を学ぶこととした。

4. コード奏法レベルの設定

各レベルの演奏の演奏例として、筆者が楽譜と演奏法についてのプリントを作成し、それに沿ってコード奏法

プリントレベル 1 (表 2)

レベル 1 根音のみの演奏。

レベル 1 では、表記されたアルファベットをコード (和音) ではなく、英語音名として読み、単音で演奏する。

右手の主旋律に支障がないよう、(支障とは演奏が止まる意図しない速度変化)、最小限の回数で弾くことから始める。

レベル 1-1 (譜例 1)



レベル 1-2 (譜例 2)

左手を入れる回数を増やして演奏する。



に取り組んだ。ここでは「どんぐりころころ」を使用して各レベルのコード奏法例を学んだ。(表 2～表 6)

まずは初学者から上級者まで同時にレベル 1 からレベル 5 まで全てのコード奏法についての理論と実際にキーボードで演奏して各レベルの奏法を体験させた。

プリントレベル 2 (表 3-1)

レベル 2 和音で演奏

主和音である I は基本形を演奏。IV・V は、主和音の基本形に近い位置の IV・V を見つけ演奏する。結果としては IV・V は転回形を引用することになる。(密集配置での演奏) 主要三和音の転回形の理解は後に結果論として理解することにする。

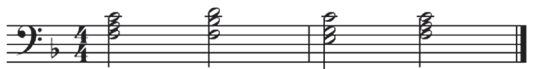
ドミナント・モーションの I → IV → V → I の和音進行を繰り返し練習した。(譜例 3)

へ長調

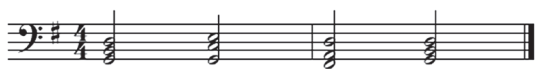


プリントレベル 2 (表 3-2)

へ長調



ト長調



V でのセブンスコードでは押さえることの難しい音を省くことや、セブンスコードをトライアドコードに置き換えることを認める。

右手のメロディに支障がないことを前提に、最小限の回数を弾くことから始める。慣れてきたら曲想に合わせて回数を増やして演奏する。(譜例 4)



プリントレベル3（表4-1）

レベル3 和音での簡単な変奏

レベル2のコードでの演奏を簡単な変奏で演奏する。1年次からピアノ教本として使用している大学ピアノ教本での伴奏法、基本和音から分散和音での変奏法を参考に、曲想に合わせて変奏する。譜例5～8。

譜例5 分散和音の伴奏形(その2)



譜例6 分散和音の伴奏形(その3)



プリントレベル3（表4-2）

譜例7 分散和音の伴奏形(その4)



譜例8



プリントレベル4（表5）

レベル4 レベル2～3の混合

曲想に合わせて和音での演奏や変奏で演奏する。

譜例9



プリントレベル5（表6-1）

レベル5 レベル1～4にそのほかの演奏法を取り入れて演奏。

曲想に合わせ、構成音（コードトーン）、アルペジオ、オブリガード等を取り入れて演奏する。

譜例10-1



プリントレベル5（表6-2）

譜例10-2



4. 各レベルの特徴と考察

4-1 レベル1

根音のみでの奏法の長所は、アルファベットを英語音名として読めば、コード奏法としての3音又は4音を咄嗟に考えなくてもよい。また、数多くあるコードを全て覚えなくても演奏することができるため、学んだことのないコードであっても英語音名が理解していれば演奏することができる。例えば、譜例の「どんぐりころころ」の7小節目にハ長調の主要三和音ではないDコードが表れるが、根音のみでの奏法であれば英語音名のDのみ弾けばよい。このことから、右手のメロディや歌唱に集中することができる。（譜例2）

全ての学生に対してまずはレベル1での左手の伴奏のみ演奏させたところ全員が2～3回の練習で演奏できるようになった。次に右手での主旋律を加えて両手で練習した。ピアノが苦手な学生は、右手の主旋律が止まらず

弾けるようになることに苦労していたが左手の伴奏には苦労をしていなかったことから、初学者でも無理なく弾けるレベルである。

しかし、左手を単音で演奏するため、ピアノ演奏による曲想表現が十分ではないと言える。

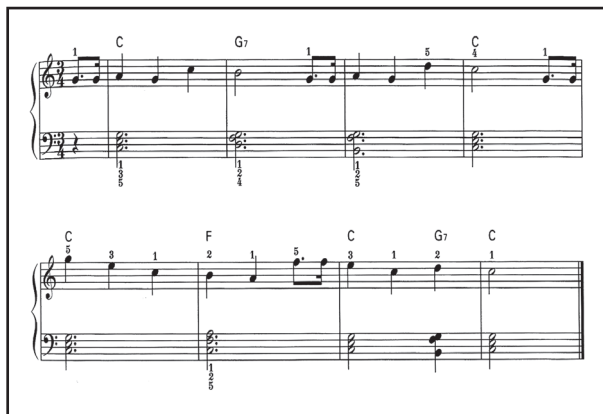
4-2 レベル2

コードを和音で演奏するとコード進行が生まれ、コードのつながりによってメロディの流れを方向付けることができる。またコードでのハーモニーが形成されることにより、根音の単音奏法に比べるとより豊かな曲想表現ができる。

欠点としては、和音で演奏することで音楽の流れや色彩が表現でき、全体的にゆったりした曲には和音での演奏があっているが（譜例 11 ハッピーバースデー）、伴奏からリズムを感じられないため、活動展開に制限ができる。内田（2017）はリトミック要素^vでは、二分音符はゆっくり歩く、四分音符は歩く、八分音符は走る、タッカのリズムはスキップであると述べており、「どんぐりころころ」は4分の2拍子であるため、和音奏法だと二分音符で演奏することとなる。リズムの感じ方としてはゆっくり歩くという感じ方になる。多彩な音楽活動をするにはリズム演奏も必要となる。

各調性の主和音は基本形で弾くように指導し、IV・Vコードは主和音に近い位置の和音を見つけさせてカデンツとして何度も繰り返しポジショニングの練習をした。コードは頭で理解できても、実際演奏するときに瞬時に反応することが難しく、何度も繰り返し練習する必要がある。

譜例 11



4-3 レベル3

レベル2の和音での演奏にいくつかの簡単な変奏を取り入れる。レベル2で述べた欠点を補う演奏法となる。

伴奏形が数多くあるため、様々な活動を展開できる奏法である。

学生はこれまでのピアノ教本習を習得してきた影響でピアノ教本に記載されている伴奏法の定型を自然と演奏しているため、伴奏形の例として、ピアノ教本に記載されている伴奏法、「基本和音から分散和音での変奏法」を見直し、教本での伴奏構成を改めて再学習した。

4-4 レベル4

曲想に合わせて和音での演奏や変奏で演奏する。レベル3同様伴奏形が数多くあるため、様々な活動を展開できる奏法である。それに加え部分的に和音を使用することで曲や歌詞に適した演奏ができる。

さらに曲の終わりはドミナント・モーション^{vi}になっている場合が多く、その部分は和音で演奏されることによって、リズム奏法よりも音楽の流れをより感じることができるため、レベル3のリズム変奏と和音での演奏を組み合わせることにより曲の中で変化が生まれる。

初学者の学生は1曲の中の途中で伴奏形を変化させることが難しいようであった。

4-5 レベル5

曲想に合わせ、構成音（コードトーン）、アルペジオ^{vii}、オブリガード^{viii}等の飾りを取り入れて演奏する。

このレベルの演奏はピアノ上級者が選択していた。和音での演奏とリズム変奏に、音楽の飾りとなるアルペジオやオブリガードを加えることにより、曲の物語、情景、心情を表現することができる。

5. 結果

5-1. 学生アンケート

ここまでの指導を経て学生にコード奏法についての簡単なアンケートを行った。

初級の学生

- ・コードネームを覚えるのが難しいが、学んでいくうちに理解できてきた。
- ・コード奏法が実習でも役に立ってよかった。
- ・弾き歌いがパッとできるようになることを学べた。
- ・根音を左手で弾くだけで伴奏になることに驚いた。
- ・個人指導で丁寧に教えてもらえてできるようになった。
- ・コードを使って自分なりにアレンジをもっと学びたいと思った。

中級の学生
<ul style="list-style-type: none"> ・同じ曲の中でも、歌詞によって引き分けることができるのがすごいと思った。 ・コードは自分なりに工夫できるので学べてよかった。 ・和音を作ることが楽しかった。
上級の学生
<ul style="list-style-type: none"> ・より豊かな即興演奏ができるようになってみたいと思った。 ・簡単な伴奏付け、コードを知ることができて良かった。 ・子ども達と一緒にどう展開するかを考える機会になってよかった。

5-2. アンケートの考察

アンケート結果考察のため、ピアノ実技のレベルを1年次のピアノ実技試験の点数を参考に、初級、中級、上級と位置づけ、それぞれのレベルの学生がコード奏法に対しどのようにとらえたかを調べた。

初級の学生のアンケートを考察すると、講義でのコード奏法の学びを個人指導に引継ぎをして確認と指導が受けられたことにより初級レベルの学生でもできるようになったと感じている。今後の指導でも講義と個人指導との連携が必要である。さらに、これまで譜読みにずいぶん時間がかかっていた初級の学生が、弾き歌いがパツとできるようになった、と言っている。コード奏法を取り入れたことにより、譜読みの時間を短縮することができたのではないかと推察される。

中級の学生は、和音創りや自分で工夫できる楽しさを感じており、これは和音の構造を理解することができたことである。そのことにより、弾き歌い活動の大きな目標の一つである、歌詞に合わせて演奏できる技術の習得にも繋がったと言える。

上級者は、さらに多彩な即興演奏の知識を望むと同時に、簡単にコード奏法とを知ることができたと答えており、これは、コードの記載されている一般の楽譜を見てそのまま楽譜通りに演奏したり、状況に合わせて簡単に音の取捨選択ができるようになったと言える。

初級・中級・上級、すべてのレベルの学生が、コード演奏のレベルアップを望んでおり、特に初級の学生でも苦手なピアノに対して向上心が芽生えたのは、弾き歌いにコードを取り入れたことがピアノ演奏に対する意識の変化を表したと言える。

6. 課題

アンケート結果では、初級の学生がすぐに弾き歌いができるようになったと答えているため、コード奏法は初学者にも適していると考えられるが、現在コード奏法を取り入れるのは2年次の「ソルフエージュ」からとなっている。1年次の「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」は幼稚園教諭免許の必修科目となっており、幼児教育学科全員の学生が受講するが、2年次の「ソルフエージュ」は必修ではない為、すべての学生が履修するわけではない。傾向としては、ピアノが苦手である初学者がピアノの練習をするのを避けるために履修をしない学生が増えているように見受けられる。

前述したように学生の約半数はピアノ未経験者であり、多くのピアノ未経験者が「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」での1年間のピアノ経験のみで保育者になっているという現状であり、コード奏法を経験しないまま卒業していくことになる。

ピアノ教本では、楽譜に記譜されている通りに演奏するように繰り返し指導を受け、楽譜通り弾かなくてはならないという考えが定着していく。しかしコード奏法は全く逆で、コードネームが記載されている既存の楽譜を、自分のレベルに合わせて音を取捨選択して弾く、つまり、楽譜通り弾かないということになる。現状では1年次でコード奏法の指導がないため、1年次の1年間はひたすら楽譜通り演奏することを反復し、2年次になって突然楽譜通り演奏しなくて良い、と言われると困惑する学生もいるのではないかと予想される。

前述したように、コード奏法は初学者から上級者の学生に効果を表している。また、コード奏法の効果として紙屋・後藤(2008)は「音楽的な雰囲気(和声的な安定効果、描写的な背景効果、その他の美的な感興効果など)を一層高めてくれる」と述べており、今後コード奏法を積極的に取り入れていくべきだと考える。ただし西海・笹井・細田(2016)は「スリーコード中心のコード奏法では手軽に始められる簡便さはあるものの、多様なコード学習へと発展させることが望めない場合がある」と述べており、コード奏法の発展形まで習得を目指したいが、発展形までの修得には期間を要し、もう少し早い段階でコード奏法を取り入れる必要性を感じた。

7. まとめ

本研究では、初学者から上級者までが自分のピアノ技術レベルに合わせた弾き歌いの技術としてコード奏法を取り入れて考察した。

学生へのアンケートの結果、具体的な奏法レベルを作

成して取り組んだことで、初学者は短時間の練習で演奏できることへの達成感やレパートリーが増える喜びを感じることができ、中級者や上級者では和音の美しさや和音やリズム伴奏を作る楽しさを感じることができたことによって、どの学生も弾き歌いのコード奏法についてさらに意欲を持って学習することができたと言える。また個人レッスンの担当教員と連携して指導することによって学生が自信を持つことができ、実践へと繋がっていることが分かった。

この指導法を継続的に観察していくと共に、さらに子どもの表現力や想像力を高める、音楽的に豊かな伴奏ができるための知識や技術を指導することが必要で、今後の授業展開や授業内容、コード奏法を取り入れる時期などについてさらなる検討が必要である。

注

- i 平成 27 年度の学生 68 名に対して入学時に行ったアンケートでは、半数以上である 38 名が初学者としての申請であった。
- ii 「教職課程のための 大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開 教育芸術社」
- iii 本学の音楽講義室に電子ピアノ 10 台とヘッドフォンを設置し、一人 1 台の電子ピアノで自主練習ができる環境とした。
- iv 「講義担当教員・ピアノ担当教員・学生、この三者が情報や課題を共有できるように、毎回の講義、個人レッスンでの成果と課題を記入させた。
- v エミール・ジャック・ダルクロワが創案したリトミックでは、歩く・走る・跳ねる等の身体運動を音楽の要素に置き換えた。
- vi ドミナント・モーションは、ドミナントから主和音へ移行する進行を指す
- vii 和音をばらして一音一音発音させる演奏法である。音を構成する音を一音ずつ低いものから（または、高いものから）順番に弾いていくことで、リズム感や深みを演出する演奏方法。
- viii メロディの引き立て役として演奏される旋律。

引用文献

- 立本千寿子 (2008) 「保育現場における音楽実践と新傾向の現状 (2 音楽科カリキュラム再考, IV 指導内容とカリキュラム)」学校音楽教育研究 12 巻 pp, 128-129
- 大谷純一 鈴木泰子 大場麻美子 (2004) 「今日の保育者養成校における音楽教育に関する一考察一幼稚園側の要望を手がかりに一」第 57 回日本保育学会大会発表論文集 pp, 562-563
- 幼稚園教育要領解説 2 節「表現」2018 年 (文部科学省)
- 幼稚園教育要領解説 2 節「環境」2018 年 (文部科学省)
- 幼稚園教育要領解説 2 節「言葉」2018 年 (文部科学省)
- 植田 恵理子 (2013) 「幼児の音楽的下地育成に関する一考察：単純な音楽的表現の積み重ねから (3. 幼児の音楽表現, III 表現活動の展開)」学校音楽教育研究 17 pp, 207-208
- 中野研也・河野久寿 (2012) 「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」仁愛女子短期大学研究紀要第 44 号 pp, 71-78
- 紙谷信義・後藤みゆき (2008) 「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果ーアレンジに寄る伴奏法を考える」東京未来大学研究紀

要第 1 号 pp, 72-73

大学音楽教育研究グループ (1977) 「教職課程のための大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開」教育芸術社

寺田真由美 「保育のうた 155」(2014) ひかりのくに株式会社

篠田元一 「実践コード・ワーク理論編」(1991) リットーミュージック

A Study of Training Musical Expression at Schools for Nursery School Teachers — The Effects of Learning to Play Chords — UCHIDA Emiko

